

シンガポール研修報告書

認定こども園ベアーズ

○シンガポール研修日程

10/12 アセンション幼稚園

10/13 キャタピラー・コープ幼児教育センター
チェリーハート・ディスカバリー・ランド

10/14 オデッセイ・グローバル幼稚園
EIS インターナショナル幼稚園

①アセンション幼稚園

○創立 51 年目

○教育のビジョンは、子どもたちが大人(親、教師など)から受けた愛を将来、世界に貢献することで返していくようにするというもの

○園の理念は、子どもは両親によって我々に委託される神からの贈り物であると思っている。あらゆる子どもには無限の可能性、潜在能力があり、尊敬に値する。子どもたちが熱心に生涯を通して学ぶことのできる人間になれるよう助けになり、環境を作っていく。

○園舎の前には教会があり、キリスト教の教えを取り入れた教育を行っている。



“You Can Do It!”

言葉に出すことで現実になるという教えがあり、子どもたちにしてほしいことを言葉にして壁に掲示しておき、子どもたちが読み上げることで身についていくと考えている。信頼、正しい行動、感情の抑制、忍耐、調和などの基盤を得ることを目標としている。

○職員に対しての子どもの割合は

18-30 か月(Playgroup) 1 : 8

30-36 か月(Nursery1) 1 : 12

36-48 か月(Nursery2) 1 : 15

48-84 か月(Kindergarten) 1 : 25

補助職員をつけると子どもの数を少し増やすことができる。

○クラスをいくつかのグループに分けて 30 分で遊びや活動を交代していく。分かち合う心をみつけたり、変化に対応する力を身につけるためでもある。

○5 歳からパソコンを教え始め、入力方法などを覚えていく。小学校 1、2 年になるとプログラミングを行うのでかなり早い時期からパソコンに触れている。

○テーマカラーを決め、決めた色のものを集めて遊ぶ Colour Day

職業を見学したり、乗り物に乗ってみたりする Occupation Day などの行事もある。

○園の写真



園の入り口



教室を出るとすぐに小さな園庭がある



園舎の前の教会

○ “You Can Do It！”の考え方によって教室内は様々なところに掲示物があり、掲示物の多さに驚いた。年齢が低い子どもたちの教室は低い位置にしか壁がなく、上はガラス張りになっていて、隣のクラスの様子も部屋の中から見られるようになっていて、安全面の工夫もあった。5歳からパソコンを使っていて、早いうちからプログラミングを習うということを聞き、シンガポールの教育熱心さを感じた。また、分かち合うという考えが浸透しており、玩具の取り合いなどによる喧嘩もないらしく、周りの人を大切に思う心など見習うこと多かった。

②キャタピラー・コープ幼児教育研究センター

○2014年に開設。

○育成機関の組織の中にあり、職員はカリキュラムを実践し、教育の研究を行っている。

○ビルの中にあるが、デザイナーによって広く見えるよう工夫がなされているため、3歳以上のクラスには壁がなく、棚や床の色で区切りが付けられている。園庭はないが砂場が作られており、屋根がないため外と同じような環境で砂遊びができる。オープンストラクチャーという考え方で、山型の固定遊具などを明確な呼び方をせず、「山かもしれない」「○○かもしれない」と子どもたちの想像を働かせるような遊具になっている。

○学力を身につけることは強いらないが、小学校入学までにのレベルに持ち上げる責任はあると考えているため、興味を持ったことを調べたり、遊びの中でバスの乗り方を学べるコーナーを作られている。

○職員に対しての子どもの割合は

・乳児 1:3 2歳 1:7 3歳 1:12 4歳 1:15 5歳 1:15 6歳 1:15

・各クラスに英語、中国語の先生がいる。

・職員はほとんど大卒である。

○散歩にも出ており、図書館やスーパーなどに行ったりもする。

○食堂があり、クラスごとに順番に利用する。

○「もったいないばあさん」など日本の絵本もあった。

○ビルの中にある施設をはじめて見たのですが新鮮だった。施設に入るときに体温チェックや手の消毒はどこでもしているが、足の消毒ははじめて見た。広くない空間を有効活用するた

め様々な工夫があり、大人も子どもも楽しめる環境を目指しているので、大人でも心が動くようなものが至るところにあり、とても興味をそそられた。幼児教育の研究を目的に作られた施設であり、研究という言葉に日本人は違和感を持ちそうだが、子どもたちのよりよい成長の場を作るためには研究を重ねていくことも必要であると思う。空間の工夫や幼児教育を追及しようとする熱意を見習っていきたい。

③チェリーハート・ディスカバリー・ランド

○開園6年目、他のところにもいくつかある。

○3ヶ月から6歳までの乳幼児が通っている。

○スローガン

- ・健康的、活動的に優れた環境づくりを行う
- ・道徳観念、思いやりの心を大切にする
- ・地域社会に貢献できる能力を身につける

○園の方針

- ・分け合う、与え合う心を育てる
- ・敬意を持ち、人だけでなくものも大切にする
- ・確固たる信念を持つ
- ・周りの人と協力する
- ・学ぶことへの情熱を育てる

○長時間利用する子どももいるため第2の家庭としての役割を意識している。また、各地にある施設と保育の質の均一化を図る(カリキュラムだけでなく、情熱も同じに)。

○父兄はパートナーであり、家庭との連携を大切にし、イベントや保育にも参加してもらう。

○園の写真



子どもが家庭で作った作品を展示して、共有する。



図書館を真似てごっこ遊びの環境が作られている。パソコンやバーチャードリーダーも置いてある。



棚で空間が仕切られていて、子どもの製作物も多く掲示されていた。



子どもたちが自分で書いたごみ箱の使い方を貼っている。



机の近くには、食事の用意の仕方が貼ってある。



「私たちは…」というように子どもたちにしてほしいことや意識してほしいことが掲示してある。

○この園もビルの中にあり、限られたスペースをうまく使っている印象をうけた。子どもたちが作った作品を掲示して達成感を味わえるようにしたり、ものの使い方、生活の仕方を子どもたちが描いてポスターを作ることで、より意識できるようにしていることが良いと思った。ごっこ遊びで小さな図書館を作り、遊びを楽しみながら貸し出しの仕方などが学べておもしろいと感じた。園の入り口などに保護者に読んでほしい記事などを貼り出したり、職員全員で共有できるようアレルギー食材の表を掲示したり、皆で共有し、連携を図っていこうという考えがよく伝わってきた。

④オデッセイ・グローバル幼稚園

○理念

- ・世界に出て通用する能力を身につけられる基礎を育てる
- ・卒園後、どんな文化、社会にも対応できるようにする

○イタリアの「レッジョ・エミリア」をシンガポールに適するように取り入れている。

○方針

- ・子ども優先、中心で
- ・型にはまらないよう、ちょっとずつ変化を加えていく
- ・外部の人(様々な職業の人とコラボし、連携していく
- ・職員のスキルを上げるために、保育技能向上のためのトレーニングに行かせている
- ・多様性を受け入れる(文化だけでなく障がいなども)

- ・Hands - on 手を使って
- ・Minds - on 方法を考える
- ・Hearts - on 興味をそそる

○カリキュラム

- ・英語
- ・数学遊び
- ・中国語
- ・音楽
- ・美術
- ・運動遊び
- ・自然に触れる
- ・料理など様々な年4つのプロジェクト

○園内に様々な部屋がある

- Piazza 自由に遊べる空間
- D'pranzo 食堂
- Little Chef Lab 子どもが使う調理室
- Children's Library 図書館
- Atelier 制作室
- Music and Dance Studio 音楽室
- Children's Museum 展示室

○障がいを持つ子どもが入園した場合、健常児と同じように生活していくが、重い場合は専門家をつけるようにする。

○連絡帳はないが、ネットで写真をアップするなど、様々な方法で様子を伝えている。

○子どもたちが作った作品を父兄に買ってもらい、チャリティーをしている。

○子どもの調理室の隣に本当の調理室があり、作っている姿を見て学んだり、解らないことをすぐに質問することができる。また、早すぎることはない、1歳児から調理をしている。

○富裕層の家庭の子が通う園で教育への意識がとても高く、施設自体もかなり整えられ、専門の先生もいるということで驚くことが多かった。年長児の部屋では卒園プロジェクトの準備が行われており、I Pad を使って解らないことを検索したり、自分たちで何が必要か考えたりしていた。「どんなものが必要か」「なぜ必要か」「してみてどうだったか」まで考えるということを聞き、感心した。子どものこともとても大切に思っていて、座るときは床ではなく、必ず椅子に座らせたり、クラスの壁に顔写真を付けたプロフィールが貼ってあり、友だちのことをよく知り、大切にできるようにしてあって、とても良いと思った。特に印象に残っている話がシンガポールでは男性職員が子どものトイレに付いて入るのを禁じているという話だった。それは犯罪防止のためではなく、周囲の疑いの目から男性保育士を守るためということであった。日本ではありませんそのような話があまりなく、そういう見方もあるということを知った。

⑥EIS インターナショナル幼稚園

○EIS(イーズ)の由来

- ・イーズの意味は「安心(ease)」である。子ども、保護者にとっていつも、いつまでも安心できる存在、場所でありたいという意味。

○子どもたちの今やってみたいこと、自分が選んだことをする。子どもたちの「やってみたいエネルギー」を大切にしている。

○3つの想像力育成から想像力を養う

- ・人の気持ちを理解する想像力
- ・立体の想像力
- ・時間の経過による変化の想像力

○通っている子のほとんどが母国語を日本語としている。各クラスに日本語と英語の担任がいる。イマジネーション教育を取り入れ、保育の言語を英語で行い、自然に英語が身につくようにしている。

- 日本で免許を取った担任をつけて、日本人として大切にしたいこと(くつを揃える、座って食べるなど) アイデンティティを確立する。
- 2週間毎に定められたテーマに沿ってカリキュラムを構成する。子どもたちの必要に応じて適切に保育活動を進める。
- 他の日本人学校と連絡会を行っている。
- 園の写真



園庭に力を入れているようで、広くて芝も整備されている。



外に食堂があり、ここで食事を摂る。訪問時は発表会の練習をしていた。

- 今回の研修で訪問した園では、他の園とは方針が違い、様々な能力を身につけさせるというもののではなく、「子どもたちのやる気を大切にする」「自然に身につけさせる」というもので、共感できるところが多くあった。日本からシンガポールに来た子どもも、今後日本へ帰る子どもが通っているため、日本の文化を生活の中に取り入れたり、部屋の環境も壁面が日本の保育雑誌を参考にしてったり、日本を感じられるように工夫がなされていた。園庭に力を入れているということで、広くて芝が整備された園庭が気持ち良さそうだった。他にも少し小さめの園庭には小さいサッカーゴールなどがあり、運動あそびも集中して遊べそうであった。

○研修を終えて

今回のシンガポール研修に参加して、文化の違う環境の中で様々な体験をし、実際に自分の目で見ることで、自分自身の世界が広がったと感じた。訪問したそれぞれの園に様々な特色があり、工夫がなされているところが多くあった。共通していたのは、知識と能力を身につけ、将来世界に貢献すること、多様な文化、価値感を認め合う心を身につけることであった。日本でも将来社会に出て貢献したいという思いは誰でも持っていると思うが、どちらかと言えば「自分の将来ため」という思いの方が強いのではないかと思う。また、日本独自の文化があり、強く根付いているので、他の文化、価値感を受け入れられないこともある。様々な違いを感じたが、日本でも、シンガポールでも「子どものために」という根本的な思いは同じだと解った。文化の違いもあり、見てきたことをすべて同じように真似してみることはできないが、遊びの中に取り入れてみたり、広い視野で保育を行い、日々の保育が子どもたちにとってより

よいものであるように努めていきたい。

貴重な経験をさせて頂きありがとうございました。感謝しています。海外に出てみることで日本の良さに気付けたり、他の園の様子を見たりすることが今までなかったため勉強になり、考え方などの違いを知る良い機会となりました。研修に参加させて頂き本当にありがとうございました。